高等学校におけるセーリングのマネジメント

坂　口　英　章　　木　村　公　喜

1．緒言

セーリング（ヨット競技）は、オリンピックをはじめ世界大会を要する。しかし、わが国における、普及度はこれだけ海岸線に隣接する都市が多いにもかかわらず少ない。

ヨットでは、単にスキルアップを図るだけではなく、セールの操作ミスなどにより船艇がひっくり返り、海に落ちる、ブームで頭を討つなどの危険性を伴うことから、このことによる不安を解消する管理も必要となる。このことが、ヨットをはじめて行う局面において、楽しみになるか否かに影響すると考えられる。ヨットのセーリングにおける初心者の不安は、ヨットが傾くことと風力の強弱が大きな要因であるとの報告がある[1]。

本研究は、高等学校の段階におけるヨット部の管理をヨット普及のための社会化を交えて論じた。

2．研究方法

セーリングの現状を調べ、社会学視点で以下の　の項目について評価した。

○わが国のセーリングとその環境

○セーリングを始めるポイント

○セーリングのマネジメント

３．研究結果・考察

（１）　わが国のセーリングとその環境

セーリングは、自然を相手に大海原に浮かべたポイントを通過し、ゴールスピードを競うものである。このため、その練習環境には、海、ヨットなどを管理する施設、ヨットの確保など、他の種目に比べ、コストも大きくその環境の設置が困難である。また、セーリング指導者もヨット施設に必ずしも配置されておらず、レッスン上の選択も限られている。

図１　高校総体で採用されている FJ 級の２人乗りヨット

図２　国民体育大会で採用されている少年男子セーリングスピリッツ級の２人乗りヨット

（2） セーリングを始めるポイント

ものごとを初めてスタートするきっかけとして、「重要な他者」がある。このことは、全国のジュニアヨットクラブに所属している選手1276人に対する調査では、「両親」が最も多く、主体的に開始したと考えられる「自分」と答えたもの僅か７％であったとの報告がある[2)]。ヨット種目を中学校までに経験している生徒で、進学後もセーリングとしてその継続を希望するものは、場合によっては出身地にヨット部をもつ高等学校がなければ、他県へ進学せざるおえない。その後、大学進学においても同様のケースが発生している。練習環境に恵まれれば、技術習得は効率よく成され、大会において上位を目標に、これを達成するチャンスも大きくなる。このことは、生徒たちにとって、大きな成功体験となり、相乗効果でセーリング力の向上に拍車をかける。

周知の通り、セーリングは、アメリカズカップをはじめ、オリンピックなど世界規模のメジャー大会を要する。このような場で、活躍する国内選手が登場するようになることは、セーリングの普及のポイントとなるであろう。

（3） セーリングのマネジメント

高等学校における、ヨット部の管理を行う場合には教育過程であることも配慮しながら、成長段階での心身の状態を理解し遂行する必要がある。

性差の違いとして、TSMI（Taikyo Sport Motivation Inventory）[注1)]調査の結果として、ヨット競技選手の競技意欲は、男子に比べ女子の方が「成功達成傾向（競技達成動機）」が若干低く、「失敗回避傾向（競技不安）」が若干高く、このためコーチ受容が高くなっているとの報告がある[3)]。

わが国のスポーツへの社会化研究は、1980年代から行われ[4,5,6,7,8,9)]ている。これらは、ヒトの行動において、受け身による影響から、本人の主体性によるものとの検討がされてきた。セーリングには、ペアによる種目もあり、この相性を評価した研究では、メンタルトレーニングを行い TEG（東大式エ

ゴグラム[注2)]心理テストを用いた結果、人間関係の側面からみると交流がうまくいっていないと思われるペアがみられたと報告している[10)]。ペア種目は、個人種目やチーム種目とも異なる特性が考えられるため、メンタルマネジメントなどのプログラムも取り入れた指導が必要と考えられる。

スポーツに対するニーズは、マズローの欲求階層[11)]に重ねあわせることができる[12)]。これは、生理的欲求・安全の欲求・社会的欲求・尊厳欲求・自己実現欲求の順に５つの階層となっている。自己実現という極みに向け、高等学校の段階でひとつでも上の欲求階層に達することもその後の子どもたちのライフワークに役立てられるように図りたい。

セーリングを競技の側面から考えると以下の事柄が重要となる。スポーツにおける戦略（strategy）と戦術（tactics）は、それぞれ、「スポーツ組織の目標を達成するために、いかに組織行動するかという長期プランを、組織の諸資源の最適配分を行いながら決定すること」と「作戦と戦闘をもっとも効果的にするための方策」とし、将来の進むべき方向性とシナリオという what を意味する「経営戦略」に対して「戦術」は、ある局面における個々の戦闘の方策や、ある目的を達成するための手段を示す How to であり、標準化された組織や行動によって解決される課題であるといわれている[13)]。セーリングに限ったことではないが、より明確な指示や助言は、実施者にとって効率のよい歩みとつながる。高等学校の段階では、理解しやすい言葉の使用などに配慮する必要がある。チーム管理に必要な指示の受け渡しについて、コーチなどから伝えられる指示が選手に受け入れられるには、強制的勢力・報酬的勢力・専門的勢力・正当的勢力・準拠的勢力・情報的勢力の６つのタイプ分けができるとされている[14)]。山下ら[15)]は、体育教師と生徒間の影響過程を分析した結果として、強制的勢力として、「そうしないと怒られるから」、「先生が怖いから」や報酬的勢力として「成績があがるから」、「あとで役に立つから」、専門的勢力は「スポーツのことをよく知っているから」、「高度の運動能力をもっているから」、正当的勢力は「自分は生徒の一人だから」、「そ

れが決まりだから」、準拠的勢力として「先生に喜んでほしいから」、「好きだから」、情報的勢力は「自分が何をしてよいかわからないから」と報告している。

リーダー行動は、業績に関心を向ける行動であるタスク志向と人間関係志向の２つの次元の相互の度合いによりなる[16]。大学体育系サークルを対象とした研究において、タスクと人間関係の両方に高い関心を示すリーダーほど、もっとも高い成果をもたらしたことを示唆した報告がある[17]。また、高校バスケットボールチームを対象とした研究では、メンバーとの関係がひじょうに良い場合と逆に非常に悪い場合では、タスク志向のリーダーの成果が高く、メンバーとの関係が中程度に良い状況下では人間関係志向のリーダーの成果が高いことがわかった[18]。

アメリカの心理学者ハーズバーグは、人々が満足を感じる要因５つと、不満足と感じる要因５つは、まったく異なるものであるとし、それぞれ、動機づけ要因と衛生要因と名付けた[19]。このうち、動機づけ要因には達成・承認・仕事そのもの・責任・昇進がある。これは、スポーツでは目標の達成や技術の修得（達成）、正しく、プラスの動機づけになるような評価を得る（承認）、下級生も含めた試合や練習への参加（仕事そのもの）、生徒による練習（責任）、レギュラーに抜てきする（昇進）と例えることができる。

また、全日本学生ハンドボール選手権における調査で、上位に勝ち上がったチームのメンバーは、より達成欲の高く、達成動機付けの内容でも顕著な特徴がみられ、下位チームと比べて競争または、成功獲得に強く動機づけられていることがわかった[20]。さらに同調査において、上位チームの監督は、指示的リーダーシップが優位で、下位チームでは支援的、達成志向、参画的リーダーシップが優位であった[21]。高等学校の段階は、多感な時期でもある。コーチングにおいて選手への声かけは、重要なマネジメントなる。叱咤・激励や技術・戦術に関する言葉は、外向的で打ち解けるタイプの選手にはやる気にはたらき、打ち解けないタイプにはマイナスに作用し、強権発動的な言

葉は、打ち解けるタイプには逆効果となるが、打ち解けないタイプには効果がある[22)]。言葉をかける際に感情の添え方も含めた方法が、選手にプラスにはたらくように指導者やコーチなどの管理者の在り方も重要である。セーリングは、選手と管理サイドとのやりとりだけではなく、自然に対しての瞬時の判断や決断が必要となる。わが国の特徴の一つとして海に囲まれていることがあげられる。セーリングには、様々な因子が絡み合う。本研究は、その一部である高等学校段階でのマネジメントを主に論じた。スポーツ種目の普及には、アマチュア大会の延長線上にプロ環境があることや、国内はもちろんのこと世界規模の大会が存在し、トップにむけて子どもたちが目標を定められる雰囲気と環境が大きな要因となりうる。今後は、高等学校や大学におけるセーリングの指導管理について、その方法論やトレーニング内容も含めて検討していきたい。

注記

注 1) TSMI

TSMI は、Taikyou Sport Motivation Inventory の略で、日本体育協会が作成した競技意欲を測定するものである。これは、17 の尺度から構成されている。

注 2) TEG

TEG は、東大式エゴグラムと呼ばれているもので、P（Parent：親の自分）、A（Adult：大人の自分）、C（Child：子どもの自分）の 3 つの自分の姿を知るための自己分析である。

参考文献

1) 松下雅雄，森　司朗，酒井哲雄，谷　健二：小型ヨットのセーリングにおける初心者の不安要因．鹿屋体育大学紀要，6：105-110，1990.
2) 久保和之，谷　健二，川西正志，守能信次：主体的社会化論に関する一考察－ジュニアヨット選手の活動開始時に着目して－．中京大学体育学論叢，39-1，75-83，1997.
3) 柳　敏晴，谷　健二：ヨット競技選手の特性(1)－競技意欲について－．鹿屋体育大学学術研究紀要，第 11 号，pp231-243，1994.
4) 太田雅夫ら：スポーツにおける主体的社会化論の研究．順天堂大学保健体育紀要，26,

pp9-16，1983.
5) 岡田　猛，山本教人：スポーツ社会化論についての一考察－Social Agent と Socialization の相互作用の観点から－．体育•スポーツ社会学研究 3 pp79-95，1984.
6) Kenyon, G.S. and McPherson, B.D. : Becoming involved in physical activity and sports process of socialization. N.Y. Academic Press pp303-332, 1973.
7) 吉田　殻：競技者における役割形成過程に関する考察－特にバーン・アウト競技者に着目して－．日本体育学会第 41 回大会号，p166，1989.
8) 三本松正敏：スポーツ社会学における“社会化”研究の展開と課題．福岡教育大学紀要 31，pp139-149，1981.
9) 山本清洋：少年期におけるスポーツ的社会化の研究－子ども文化としてのスポーツ－．体育・スポーツ社会学研究 5 pp1-21，1986.
10) 米倉直樹，鶴原清志：ヨット選手を対象としたメンタルトレーニングに関する研究．三重大学教育学部研究紀要，自然科学，42：127-137，1991.
11) Maslow, A. H. : A Theory of Human Motivation. Psychological Review 50, 1943.
12) Milne, G.R., and McDonald, M.A., Sport Marketing : Managing the Exchange Process. Jones and Bartlett Publishers. 1999.
13) 山下秋二，原田宗彦（編著）：スポーツマネジメント．Pp164，大修館書店
14) Raven, B. H. : The Comparative Analysis of Power and Power Preference. In Tedeschi, J. (Ed.), Perspectives on Social Power. Aldine. 1074.
15) 山下秋二　他：体育教師－生徒間にみられる社会的影響過程の分析．京都教育大学教育実践研究紀要 1，2001.
16) ブレーク・ムートン：田中敏夫，小見山澄子訳：新・期待される管理者像．産業能率大学出版，1979.
17) 三隅二不二：リーダーシップの科学［改訂版］．有斐閣，1984.
18) フィドラー，山田雄一監訳：新しい管理者像の探求．産業能率短大出版，1970.
19) ハーズバーグ：北野利信訳：仕事と人間性－動機づけ－衛生理論の新展開－．東洋経済新報社，1968.
20) 畔田衣里：ハンドボールにおける達成動機と競技成績．京都教育大学卒業論文，2004.
21) 室田千恵子：ハンドボール競技における監督行動の研究. 京都教育大学卒業論文, 2003.
22) 柳川　元　他：水球選手の競技意欲を高める指導者のことばかけ－16 pf 人格検査による検討－．日本体育・スポーツ経営学会第 24 回大会号，2001.